



平成31年度研究助成 【音楽振興部門】より

サルヴァトーレ・シャリーノのフルート 独奏作品集のCD制作によるフルートの 特殊奏法および特殊音響についての研究

沖縄県立芸術大学音楽学部
音楽表現専攻
助教

若林かをり

この度、私は、一般財団法人カワイサウンド技術・音楽振興財団の研究助成を頂戴し、日本人としては初の試みとなるサルヴァトーレ・シャリーノ作曲『フルート独奏のための作品集 第一集・第二集』（1977年から2000年にわたって創作された全12曲）をレコーディングさせていただくこととなりました。

1. 作曲家サルヴァトーレ・シャリーノ

1947年シチリア島のパレルモ生まれの作曲家です。数々の賞を受賞し、世界中の歌劇場、オーケストラ、音楽祭から多くの作品委嘱を受け、[沈黙と異音の魔術師][夜の沈黙より現れし響き][かそけき音]と評されるその独特な音響による世界観は唯一無二で、今日のヨーロッパにおける現代音楽の巨匠の一人として突出した存在です。多様なメディアのために多くの作品を作曲していますが、殊に彼のフルートのための作品群は、フルートという楽器の新たな奏法の可能性を導き出し、その並ぶもののない独自性によって、新たな音による世界観を打ち立てた…と言っても過言ではありません。

「ほかの誰のものとも明らかに異なるこの音

楽は、私たちの従来の聞き方を根底から覆してしまう」と評され、独特の世界観を放つシャリーノの音楽と私との出会いは、十数年前にコンサートで聴いた、ヴァイオリン独奏のための「6つのカプリッチョ」という作品でした。ステージ上では、確かにヴァイオリンを構えた奏者がヴァイオリンを奏でているはずなのに、自分の耳に届くのは、私の知っているヴァイオリンの音ではありません!?!? それはまるで、私たちの身の周りにありふれた音を彷彿させるものでした。…ポコポコと水が湧き出ているような音、シャボン玉が膨らんで弾けるような音、森の中での何かの蠢き、びよーんとバネが飛んでいくような音…作品を聴いている間中、様々な想像が頭を巡って、まるで自分の耳が魔法にかかったような、衝撃的な体験でした。

楽器の名手たちの協力を得て開発した、新しい奏法や超絶技巧による独創的な楽器用法を用いて奏でられる音は、独特の音響をもたらします。

「作曲にあたって、私は余分なものをできるだけ削ぎ落とし、曲の構造そのものによって独自の表現を生み出すよう努めている。[……]一方、聴衆には音楽を聴くという行為

の原点に立ち戻り、音と静寂の変容を感知することを求めている。」

作曲者が語るこの言葉は、私にとって、「音楽とは？」という根本的な問いを投げかけているようにも感じます。

2. 収録作品「フルート独奏のための作品集」について

この度、CD収録するフルート独奏のための作品も例外ではなく、ほとんど全ての音が特殊な奏法による、いわゆる“普通の音”ではない音で創られています。

「フルートの音」という概念を根底から覆し、楽器の音色と特性を知り尽くしたからこそ描くことができるメチエと、溢れ出る音への新たなイメージとその獨創性によって生まれた作品は、聴き手に、楽器の存在をも忘れさせてしまうほど特別な〈音響空間〉をもたらします。「それまでには注目されていなかった〈音〉」を音楽に取り入れ、聴くものへの異常な集中力を促す考え抜かれた構成は、まるでこの世の価値観が反転したような世界をもたらします。聴き手は、〈音〉が生まれる瞬間を、音と音との狭間に〈沈黙〉を、そして、心理的な未曾有の〈音の残像〉を体験してゆくこととなるのです。

3. 特殊な演奏法の記譜について

作品の楽譜もとても個性的なもので、譜面上

には私たちがよく目にする「音符」ではなく、五線紙上には、◇型や◆、×、+印などの記号が記譜されています。

それらの記号は、例えば、尺八の“ムラ息（フルートの従来美しい楽音を基準に比較するなら…雑音の多い・いわば鋭さの勝った音色）”のような漏れた息を拡散させて風音のような効果を醸し出す指示の印であったり、通常とは違った運指を使って、紗幕がかかったような音を指定していたり、瞬間的に多量の息を瞬間的に楽器に吹き込んで、金属的な超高音の房のような輝く爆発音を煌めかせるための記号であったりします。他にも、息を吹き込む部分を唇で覆って、歌口の穴を勢いよく舌で塞ぐことで瞬間的に著しく低い音を発生させる奏法（＝瓶の口を手のひらで叩くような効果）や、基音の異なる定常波で同じ音を出しそれを交互に素早く奏することで相互の振動数のわずかな差によるエフェクトを出す奏法、指穴を強く抑える際の打撃音をパーカッションのような効果で出す指示、フルートのキーを押す／離す際に、心ならずも出てしまう微かな音のタイミングまで記譜され、それらは作品・そして演奏（パフォーマンス）の狙いとして企図されています。

4. レコーディング作業

実際のレコーディングにあたっては、マイクの種類、配置、演奏者の立ち位置などで、録音



図 1

のサウンドは全く異なる印象になります。特殊な音響を持つシャリーノ作品の収録には、どのような種類のマイクを何本くらい使用し、それらをどのような位置に置けば良いのか。録音初日には、数種類のマイクと、配置、そして録音した音に対するエフェクトを何通りも試しながら、録音の方向性を決めていきました（図1）。

特殊奏法によって奏でた音を、しかも録音された後の音を想像しながらの収録作業は、生演奏によるコンサート会場でのパフォーマンスとは全く違う感覚を要するものでした。当然のことながら、録音するマイクの位置と演奏する自分の距離は、生演奏のコンサートの時にステージ上で想像する、客席までの距離（お客様の耳の位置のある距離を想像して音作りをする作業）とは全く異なります。初日は、自分がイメージしている音と、現実に録音されている音のギャップが大きかったため、ヘッドフォンを装備し、マイクを通した自分の音にエコー・リ



図 2

ヴァーブをつけたものを聴きながら（まるでヨーロッパの教会の中の、残響の大きな音響空間でパフォーマンスしているようなモニタリングを擬似体験しながら）イメージが自由に羽ばたきやすい環境を設定して、録音を進捗させていきました。

録音時のオシロスコープのような機械の上の図形には、音の波形が反映されます。エンジニアの方は画面を見ながら、「今までいろんな楽器の音の波形を見てきましたが、この波形からは、これがまさかフルートの音だとは思えません！」と驚いておられたのが印象的でした（図2）。

シャリーノ作品は、聴こえてくる音だけでなく、目に見える音の波形までも、従来の「楽器」のイメージを覆しているということに感動しました。

録音を聴いてくださる皆様が、私自身がはじめてシャリーノ作品と出会った時に感じた衝撃

…時間も忘れるほどのワクワクする音楽体験を感じていただけることを願って、CD制作作業を進めて参ります。

5. 謝辞

本研究への研究助成と本稿執筆の機会を賜りました、一般財団法人カワイサウンド技術・音楽振興財団に心より感謝申し上げます。

参考文献／出典

『東京オペラシティの同時代音楽企画“コンポージアム 2011”』ブックレット, 「Der Klang aus der Stille der Nacht-Salvatore Sciarrino, die Sprachkraft der Musik und Kunst des Hörens」, 公益財団法人 東京オペラシティ文化財団.